

佳作

『三好達治選 萩原朔太郎詩集』 萩原 朔太郎著 三好 達治選

文学部 文学科1年 直江 紗采

《私の記憶でいふと、つまらぬ酒場か何かで、帽子を眼ぶかにして酒を飲んでおられた萩原さんよりも、風邪をひきこんだ退屈な臥床で、見物人もなしに、ひとり手品の稽古をしておられたあの人の姿の方が、一層真にあの人らしく淋しく孤独に感ぜられる。

指さきのはかない遊戯、無邪気な技術、罪のないそのさまざまな連想、さういふものがその人の気慰めとなってゐる見かけの上の他愛ない、その裏の退屈。それを見つめてみると何か絶望的な感じのする倦怠、なげやり。》

岩波版・萩原朔太郎詩集の選者、三好達治が回想する師の姿は、常に周囲の空間を静かな情緒で満たしていた。同時にその空間は、こちらの身じろぎ一つで崩れ去ってしまいそうな危うさをも孕むものだった。岩波版には、紙とインクではない、三好の見た血と肉の彼がそこで息をしている。詩人の身体が醸す静謐と緊張を、読者は享受するだろう。肉体なき「死者」が肉体の印象を感じさせるのだ。なぜそのようなことが可能なのか。

萩原は詩作において「リズム」というものを非常に重視していた。彼にとって「リズム」とは、感情が言語化される以前に働く、身体内部の感覚そのものだった。そして、人間が一人一人ちがった肉体を持つがゆえに、たとえ言葉上では同じ感情を示したとしても、自分と全く同一の感情を他者が共有することは不可能だと考えていた。しかし、言葉や文章では形容しがたいものを、詩のリズムならば表現できると信じた。つまり、彼の詩作は、自身が有する感情の肉体的リズムを、詩の調べにのせて他者の内部に伝導する試みなのだ。彼の詩に対峙するという行為は、もはや「読書」ではない。一個の体内において異物どうしの心理が融合するその過程は、むしろ「食事」によく似ている。

《かくして蛸は、彼の身体全体を食いつくしてしまった。外皮から、脳髓から、胃袋から。どこもかしこも、すべて残る限なく。完全に。(…)けれども蛸は死ななかつた。尚ほ且つ永遠にそこに生きてゐた。古ぼけた、空つぼの、忘れられた水族館の槽の中で。永遠に——おそらくは幾世紀の間を通じて——或る物すごい欠乏と不満をもつた、人の目に見えない動物が生きて居た。》

萩原の散文詩『死なない蛸』には、すさまじい食欲と結びついた生への執着が滲み出ている。全篇を通して彼は静かな情緒を基調としていたが、その根底にあるのは何時もこの食欲だった。おそろしく食欲で、それでいて、意地汚いと言い切るにはあまりに閑雅な食欲である。時代や社会に必要とされるか否か、当の本人はまったくの風任せだった。彼が必要とするのは、「食事」に不可欠な血と肉を持った一人の読者だ。彼は肉体が消えてしまった後ですらも生き続けるために、誰かを必要としている。彼の詩は読まれて初めて、あなたの世界に生まれるのだ。